



9月1日現在の中山	
世帯数	1,366
人口	3,377
【問い合わせ】 中山公民館報編集委員会 58-5822	

# 平成30年度 ふれあひひろばまつり

7月26日(木)、中山公民館をメイン会場として「ふれあひひろばまつり」が、実施されました。(主催・ひろば事業推進協議会)

かつては男の子なら誰もが経験した、竹トンボ、竹笛、水鉄砲、紙鉄砲つくり、に大人も悪戦苦闘し、流しそうめんには毎年のことながら長蛇の列ができました。そうめんをゆでてくださいる地域の女性も汗だくです。そして子どもたちは短冊に願いごとを書き七夕飾り、スイカ割り、茶の湯、紙相撲中山場所、○×クイズ、スカットゴルフ、輪投げ、シャボン玉そして考古館では弓矢、火おこしの体験と盛りだくさんのブースで老若男女が楽しいひと時を過ごしました。

よく飛ぶ竹トンボを作って子どもにあげようと頑張る



も、思うようにいかず、奮闘する大人の横で「これよく飛ぶよ」と戯れる子ども。この暑さの中で水鉄砲が人気。布製ピストリングの気密性が難しく、銃口(水口)から噴射する水量より、手前に流れ落ちる水の方がはるかに多く濡れネズミの如くなるも紅顔の少年曰く「楽しい」。流



しそうめんの桶の低い所に幼い子が数人いますが待てども待てども流れてくるのは水ばかり。これを見かねたお母さんが途中からそうめんを流す。箸使いも拙く椀に盛り、「美味しい!」。楽しさは(空腹)最高の料理人とはこのことでしょうか。

昔の遊びには竹がかくも多く、材料として使われていることに驚きました。そして生活用品にも必需でした。物干し竿・桶の箍・台所の道具など:有意義なお祭りでした。



## 中山地区 平和式典

9月7日中山小学校東側にある殉国英霊碑前でお参り、中山地域づくりセンターにおいて平和式典が行われました。

碑には、「日露四名、満州二名、日支十四名、大東亜九十六名、軍属五名、義勇軍一名、満州開拓四名」(原文のままの表記)の犠牲者の氏名が刻まれてあります。

満州事変以降のいわゆる15年戦争での犠牲者の数が多いことから、いかにこの戦争が過酷で残忍であったかを物語っています。殉国者の方々になんと申し上げてよいのか言葉がみつかりませんでした。

センターに会場を移しての式典では町会連合会を代表して洞澤勝さん、松本市遺族会を代表して佐藤或郎さん、遺族会中山支部を代表して山口裕弘さんが御霊に生前の苦難を忍び不戦の



誓いを捧げました。通路には中山小の児童の平和の詩、広島・長崎の原爆被害のパネル、中山の半地下工場の写真が展示されてあつて参列者は熱心に見入っていました。

式典終了後、DVD上映会が催され「あの日ーこの校舎でー」「長崎の記憶」を鑑賞しました。

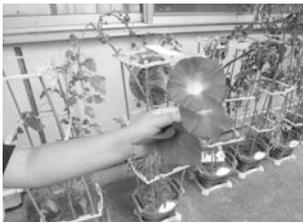
原爆体験者の生の声は見る者の胸を震わせます。心が切り刻まれる思いで鑑賞しました。

戦後73年、平和の詩を書いた小学生の祖父母が子どもだった時代のことです。

参列者の挨拶のなかの「戦争のことは歴史の中に埋もれさせず、語り継いでいかねばならない。」の言葉を忘れてはならないと気持ちを新たにしました。



シリーズ 中山小学校  
わたしたちの  
クラス紹介



夏休み前に収穫した野菜は子どもたちが包丁で切り、それを先生が

シリーズ 2 回目は、2 年生の皆さんを紹介します。クラスは男子 6 名、女子 10 名の計 16 名と、小学校の中でも一番人数の少ない学年ですが、そんな事を全く感じさせないくらい明るい子どもたちです。担任は宮寄さや香先生。今年中山小学校に新任で来た、体育が専攻のはつらつとした先生です。2 年生の教室前の廊下には夏休みの自由研究や、ミニトマトの観察記録が飾られています。生活科の授業では、1 学期に自分たちで作ったナス、ニンジン、ピーマンなどの収穫と、夏休み中に生えてしまった雑草とりをしました。



調理し、みんなで食べたそうです。

この日は雑草とりが中心だったのですが、みんな自分の担当野菜の周りの草を黙々ととっていたのが、印象的でした。

子どもたちに聞きました  
宮寄先生はどんな先生ですか？  
「ずっと笑っている。優しい。」  
先生に聞きました  
このクラスを一言で表すと？  
「パワフル！」  
子どもたちへの願いは  
なんですか？  
「自分でやるべき事は責任をもって行動できる人になってほしい。」  
短い時間でしたが、パワフルな子どもたちと、笑顔の素敵な宮寄先生に沢山の元気をもらいました。

千国街道



「塩の道」を歩く

8 月になって今年も暑さは収まる気配をみせませんでしたが「小谷バスツアー千国街道・塩の道」が 14 名 (内職員 2) の参加で 8 月 11 日 (土) に行われました。

当日は雨が心配されましたが現地はうす曇り。ガイドの田中さんのリードのもと母池高原のバス停から「塩の道」を歩いていきました。

途中、彫りの深い「百体観音」や咲き誇る野草のはなし



や言い伝えなどを丁寧話ししてくれます。

「この塩の道は沢山の塩を背負った牛、それを曳いてゆく牛方、そして松本から帰って来る様々な荷を積んだ牛と牛方でにぎやかな街道でした。冬場は歩荷と呼ばれる人たちが五十キロの荷を背負って行き来したのです。」と説明がありました。

牛や牛方、ボッカの人達が寝泊まりした「牛方宿」や往来する人の関所となった「番所」跡も見学してその生活道具や日用品から当時の暮らしぶりを想像することができます。

「当然のことながら、当時



塩は大変な貴重品だった。ゴザを出汁に使ったという話があるくらいです。人の汗がゴザに浸みて塩分をふくんで味があるから出汁に使った。」とガイドの田中さんは言うが本当だろうか。

考えてみれば味噌も醤油も塩が無くてはできません。これも大変な貴重品だったのですね。自らの生活を顧みました。夏の小谷の「塩の道」をゆつくりと散策しながらの一日は避暑と学習と適度な運動それに交流を兼ね備えた有意義な時となりました。



平成最後となる今年の夏は「記録的な○○」とか「観測史上初の○○」といった異常気象が続き、「今までに経験したことのない○○」などという、ちょっと恐ろしくなるような言い方がされることもあった。

それにとまって、各地では大きな被害が相次いだ。秋から冬にかけて、どうか「平年並み」の毎日が戻ってきますようにと祈るばかりである。  
(T・M)